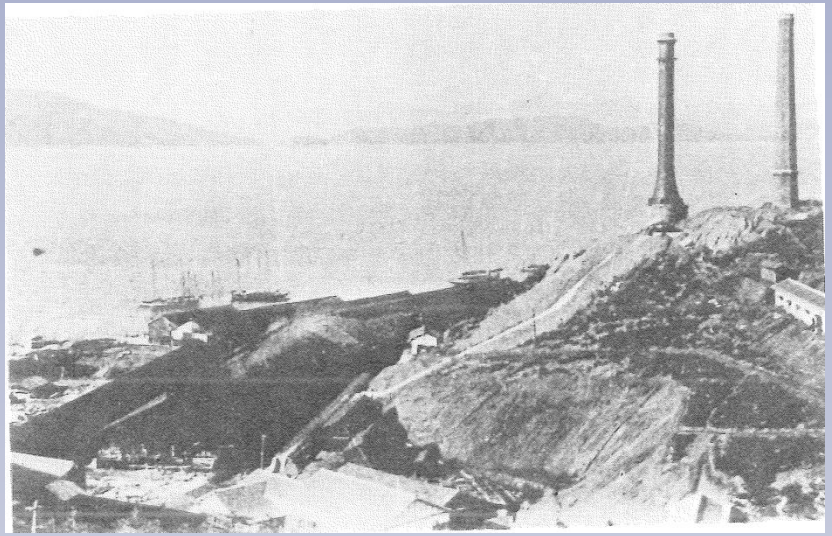
日本精蝋の歴史
【温故知新】

日本精蝋の前身

1．鈴木亜鉛製錬所
　　大正４年建設着手
　　大正５年４月に工場落成

2．日本金属株式会社徳山製錬所
　　（大正５年６月名義変更）



稲荷山から撮影
（日本金属製錬所）

現在の開発研究センターの建屋は当時の製錬所の事務所として建築された建物

八合山大煙突の歴史

大正５年４月、神戸の**鈴木商店**によって「鈴木亜鉛製錬所」が建設され、亜鉛の精錬業を開始。
オーストラリアのブロークンヒル産の亜鉛鉱を輸入し、１ヶ月４，０００トン余りの製品を出荷していた。
当時３本の煙突で煙を出していたが、煙が重く空高くあがらず、西ケ森・花の脇一帯を覆うことがあり、山林にも被害が出始めたことにより、７ヶ月の日数をかけて、**山の上に大煙突**を建設することになった。

鈴木商店とは、

かつて存在した戦前の日本の財閥商社。
樟脳（しょうのう）・砂糖貿易商として世界的な拠点網を確立するとともに、製糖・製粉・製鋼・タバコ・ビールなどの事業を展開。　さらに保険・海運・造船などの分野にも進出。
鈴木商店の子会社の1つ、日本商業会社は岩井産業と合併し日商岩井へ、更にニチメンと合併、双日のルーツの一つでもあります。

鈴木商店本社屋（旧ミカドホテル）

主な買収企業

（明治38年）　神戸製鋼所の前身の小林製鋼所
（明治39年）　ミカドホテル新館を取得
（大正4年）　**日本金属工業**、播磨造船所、南洋製糖
（大正5年）　帝国染料
（大正6年）　大田川水電、浪速倉庫、南朝鮮鉄道、信越電力
（大正7年）　**帝国石油**、日本冶金工業、東洋マッチ
（大正8年）　帝国炭素、国際汽船
（大正9年）　帝人（旧帝国人造絹糸）、新日本火災保険

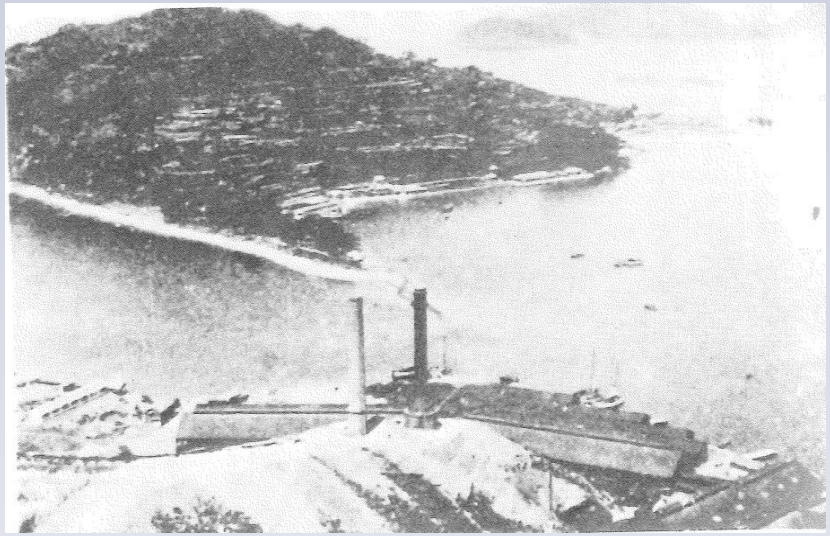
大煙突

大正５年１０月完成
建築期間　　７ヶ月
高さ　　７２メートル
直径　　１０メートル
海抜　　２２２メートル
煉瓦数　数100万個
※当時東洋一と言われた

日本金属徳山精錬所（亜鉛工場）
（大正５年～11年）

第一次世界大戦の影響で原料の輸入が難しくなり、天にそびえる７２メートルの大煙突の偉業も空しく、大正９年に閉鎖することになる。

大正１１年
「帝国石油株式会社」に施設を譲渡



（７２メートルの大煙突の上から望む）

３.大正１１年

帝国石油　徳山製油所建設

帝国石油は元来、秋田・新潟地方で石油の発掘事業を行っていた会社であったが、この地に製油所を建設して石油精製事業に乗り出す。

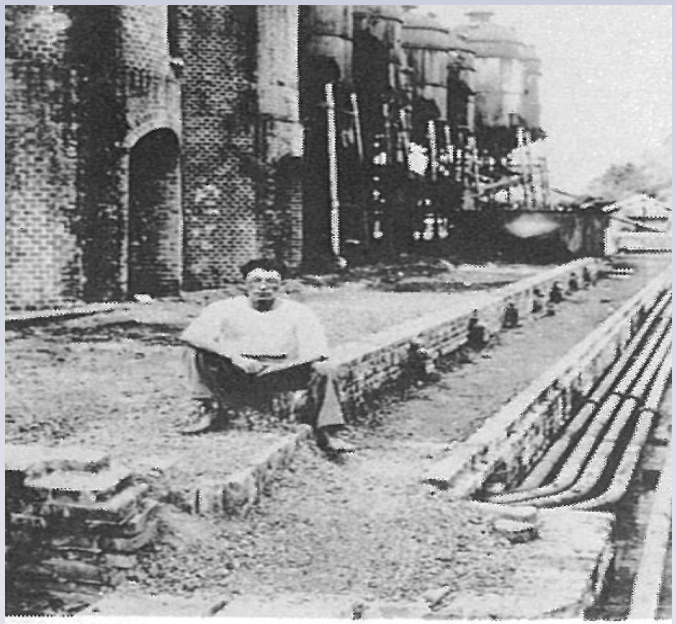
◆ 同年　旭石油と帝国石油が合併。
旭石油として新発足する。

４.昭和２年

旭石油　金融恐慌により倒産
長崎英造が再建に着手

５.昭和４年

南満州鉄道に旭石油徳山製油所を売却



帝国石油時代

４．(旧) 日本精蝋の設立

昭和４年２月　南満州鉄道株式会社の子会社として、旭石油の跡地に資本金２百万円にて設立された。

◆この地が選ばれた理由は？

⑴　旭石油の残存施設が利用できる

⑵　海軍燃料廠に隣接していて、重油等を送るのに便利

⑶　良港をもっている

【建設中の打上工場：昭和４年】

日本精蠟建設工事初期（昭和４年）

南満州鉄道とは？

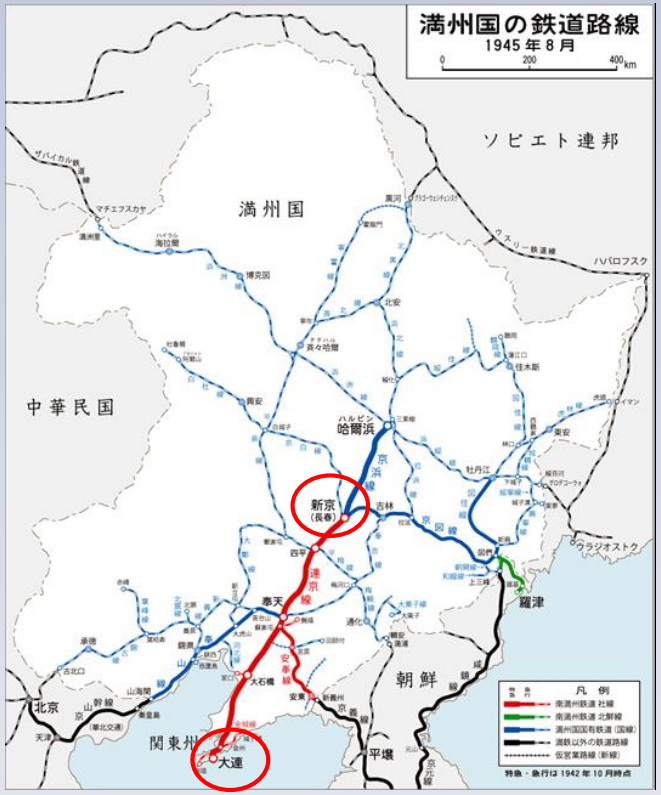
南満州鉄道株式会社は、日露戦争後の1906年（明治39年）に設立され、1945年（昭和20年）の第二次世界大戦の終結まで満州国に存在した半官半民の特殊な会社である。通称 **満鉄（まんてつ）**。

鉄道事業を中心にするが、きわめて広範囲にわたる事業を展開、満洲経営の中核となった。　本社は関東州**大連市**であるが、のちに満州国が成立すると満州国首都の新京特別市に本部が置かれた。最盛期には80余りの関連企業を持った。

（大連駅）

大連⇔新京を結ぶ

（南満州鉄道のシンボルアジア号）



(旧) 日本精蝋を設立した第10代総裁 山本条太郎氏は？

- 慶応3年 (1867年) 現在の福井県に生まれる
- 共立学校 (現在の開成中学・高校) を病気のため中退
- 衆議院議員当選 5回 幹事長等を歴任
- 昭和11年（1936年）3月25日死去
  享年68歳
- 大胆な改革を行い「満鉄中興の祖」
  とも言われたが、後ろ盾であった
  田中内閣の瓦解 (がかい) にともない
  満鉄総裁を辞任。
- 昭和2年7月19日 ～ 昭和4年8月14日
  まで満鉄１０代総裁を務める。

※昭和４年２月 (旧) 日本精蝋設立に尽力

◆設立の目的は？

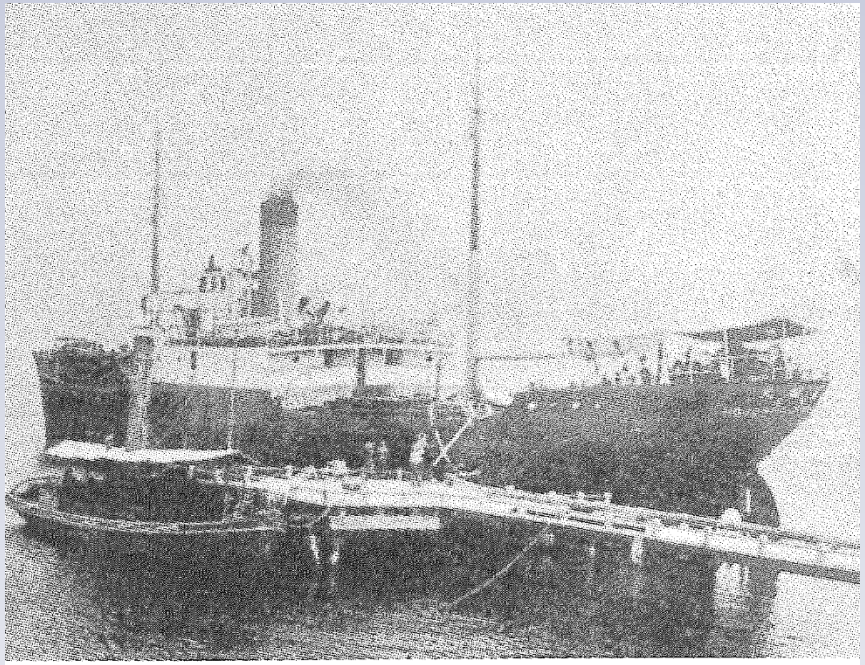
「火薬を湿気から守るため、輸入に頼っている石油ワックスを国産化する国防上の理由と、外貨を節約すると共に重油を海軍燃料廠に供給する」という発想の基に設立された。

◆操業当時の経営状態は？

創業からの数年間は赤字の連続を余儀なくされ、苦労に苦労を重ね技術開発に積極的に取り組み、障害を克服・解決していき、この努力が後年になって実を結ぶことに繋がった。

◆当時の原料は？

満鉄が撫順炭鉱で開発した油母頁岩油（ゆぼけつがんゆ）から得られた粗蝋であり、当社は石油代替エネルギー源として世界的に開発が急がれていたオイルシェールの精油技術経験を有する我が国唯一の企業であった。

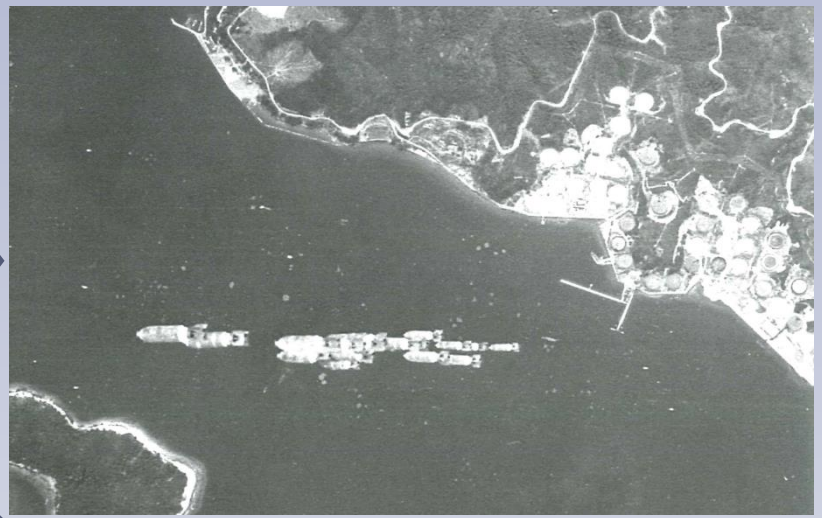


【粗蠟輸送船『鳳城丸』：昭和６年】

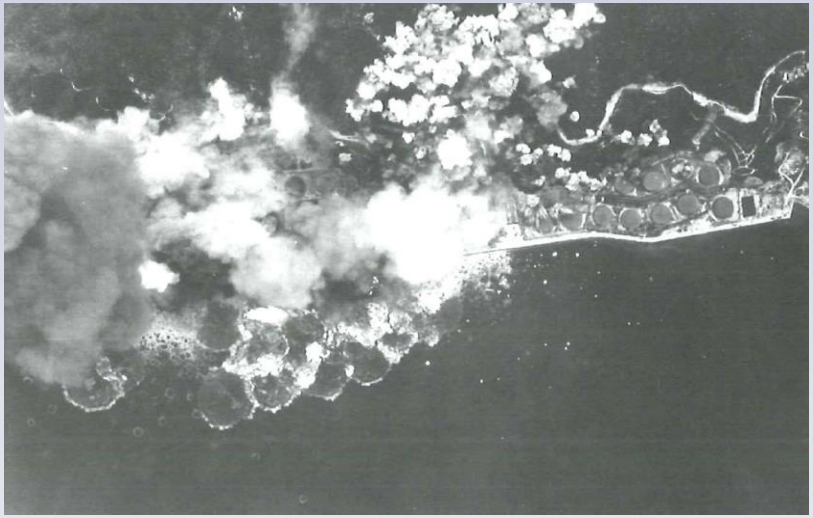
昭和20年5月10日　攻撃を受ける大島燃料置場（現大浦地区）

◆ 後の昭和33年7月　日本精蝋に払下げられた用地

（爆撃前の大浦地区）



（500ポンド爆弾の投下）



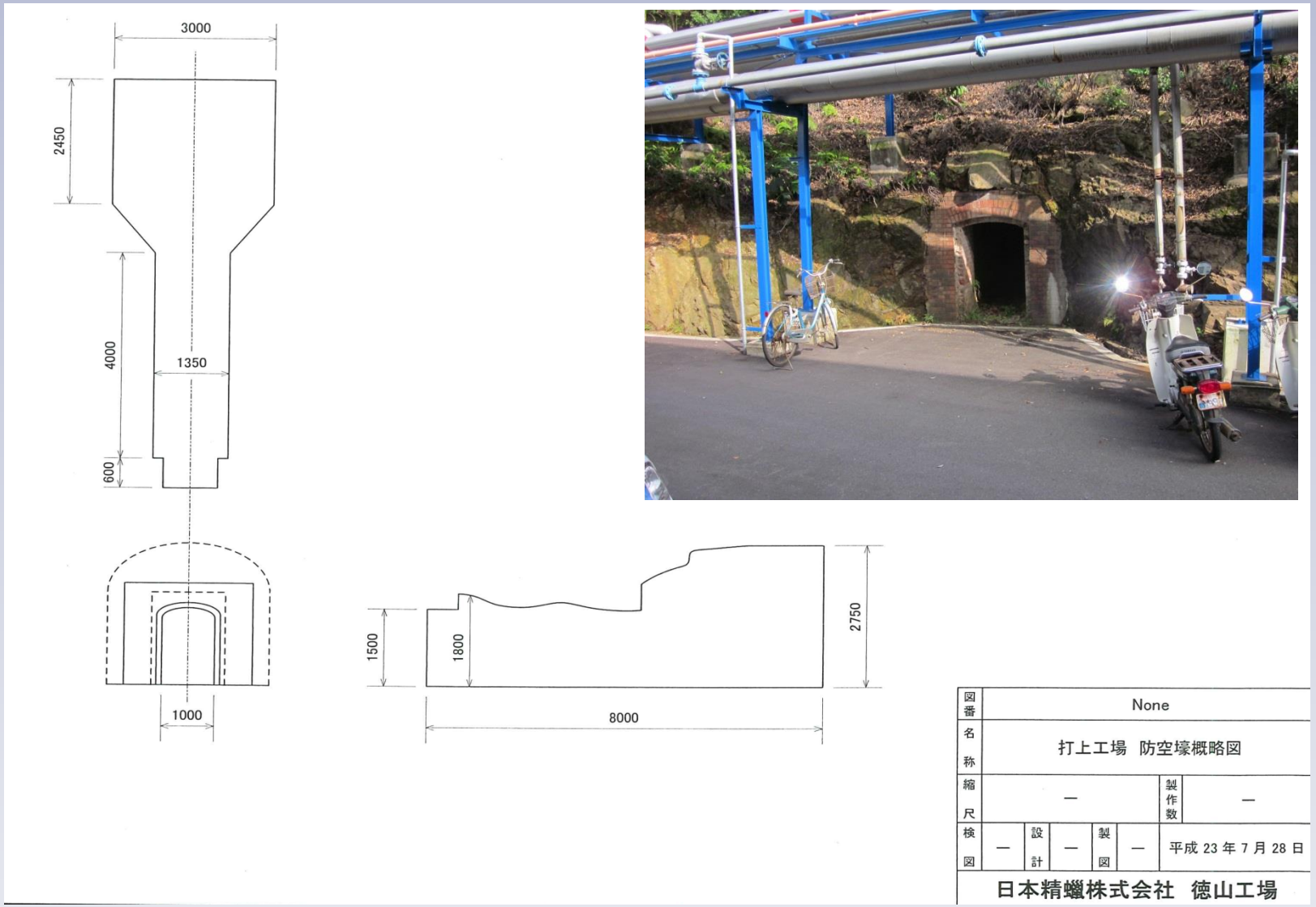
（爆撃を受ける大浦地区）

（ぺしゃんことなった大浦タンク）

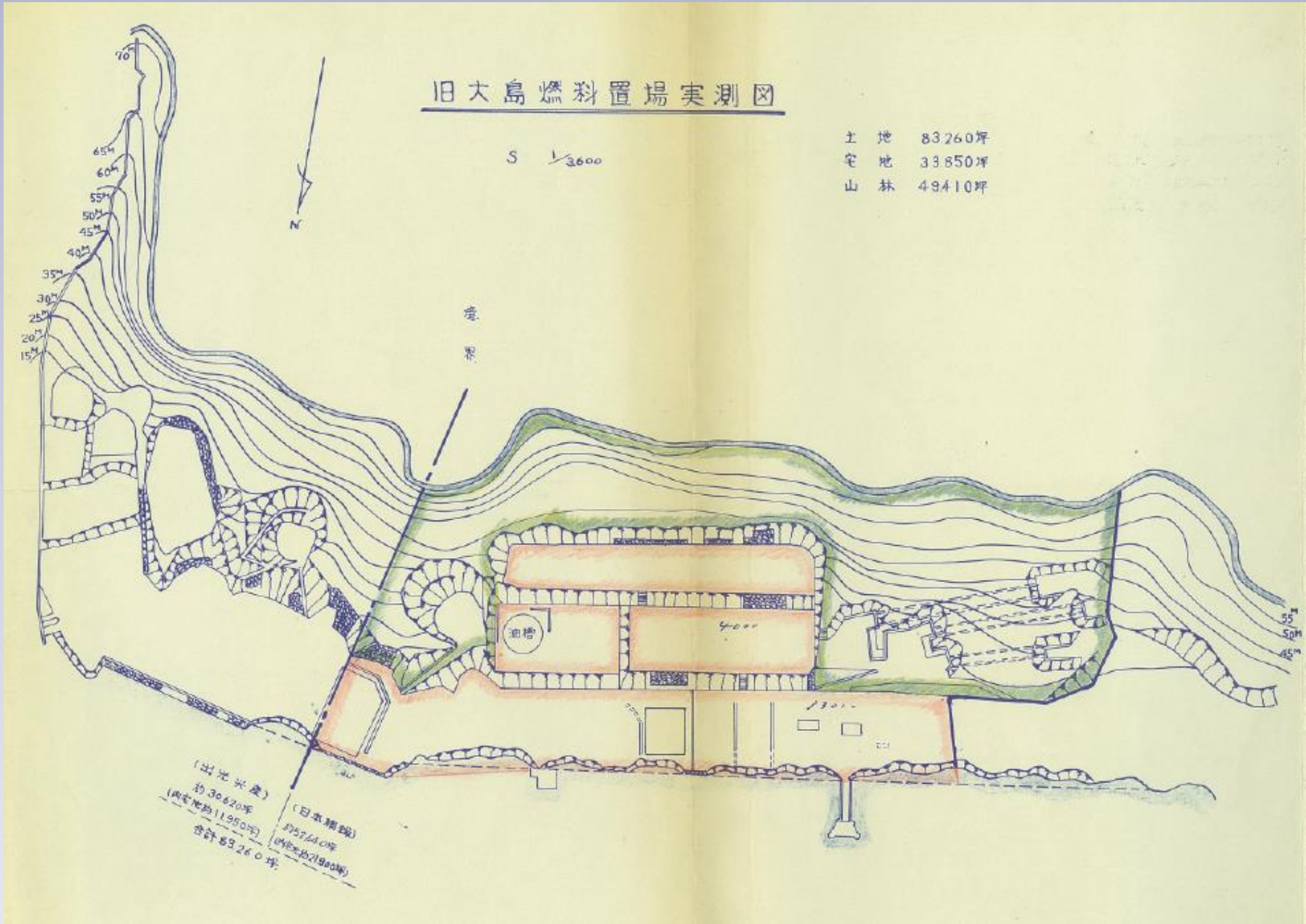
今も当工場に残る戦争の爪痕

◆ 打上工場防空壕
(場所：新事務所山側)

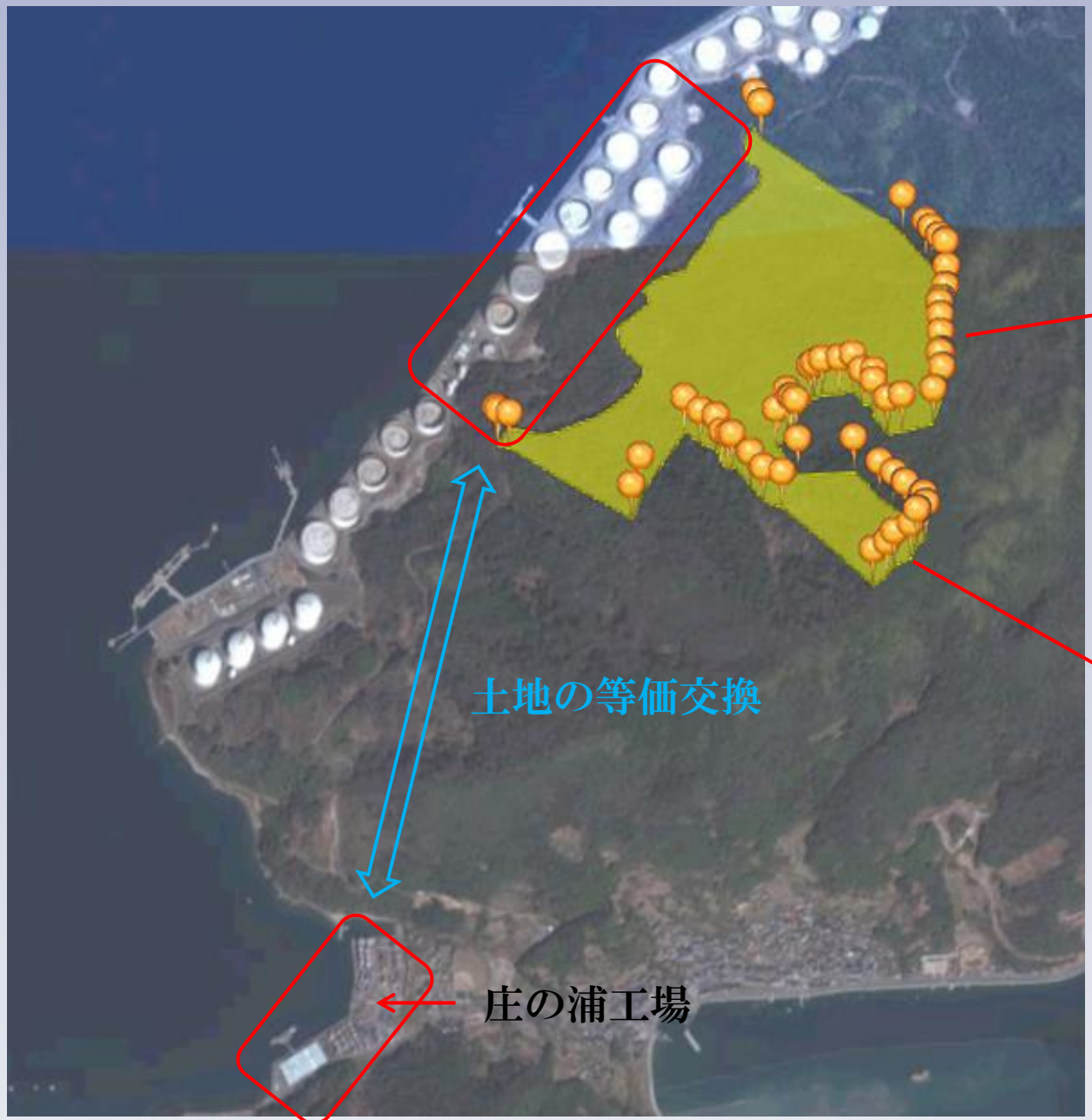
奥行：8.0m
高さ：入口 1.5m ，最大 2.8m
幅　：入口 1.0m ，奥側 3.0m



◆ 旧軍使用の大島燃料置場（現大浦地区）の払下げ用地



中国財務局の斡旋により行った出光興産との用地の等価交換



（鈴木商店石碑）

（帝国石油石碑）